

【佳作】

父に学んだ事

黒川康子・静岡県

父は仕立て屋を営んでいました。自宅の1階の一部が店舗になつており、居間と店舗の間にある仕事部屋で、いつもミシンを踏んでいました。おさない私と姉は、店舗に入る事が禁止されており、仕事部屋のすき間から、のぞくお店は沢山の見本生地が並べられ、子供心に、おしゃれな大人の世界に、ためいきと憧れを抱くようになりました。

私は父が働く姿を見るのが大好きで、学校から帰ると、友達と遊ぶよりも、たいてい仕事部屋のすみっこに、しゃがみこみ、父がミシンを踏んだり、アイロンをかける姿を観察していました。そんな時、父は私がたいくつしないようにと、生地の見本をくれました。毎年新作が出る為、古い見本はいらなくなります。大きな厚い表紙を開くと、ただ、ひたすら長方形に切られた生地が貼つてあり、上部がのりでとめられ、ヒラヒラした生地を、指でつまんだり、めくつたり、めくつた下に絵を書いたりして遊びました。

さまざまな色の布の美しさ、でこぼこのある物、ない物、ざらざらの物、つるつるの物、いったいどんな洋服が出来るのかなあと想いをはせたり、私にとつて大変な宝物でした。時には布が余ると、父は器用に人形を作ってくれました。紳士服地ではありますが、あざやかな色の、チェック柄の布地で作られた、くまのぬいぐるみは今でも大切にとつてあります。時に見本の布を指でさわっていると、父が、「その生地すごく珍しい動物の毛で出来てるんだ。手ざわり、全く違うだろ？さすがだなおまえは。」とか、

「そのページの中で一番貴重なのはどれだかわかるかい？」とか、

「その生地、ビキニーナっていう動物の毛から出来てるんだ。それで背広作つたら高いゾー。おまえの好きなベビースターラーメンが、富士山を作れる位、買えるゾ！」

などと、私がたいくつしないように色んな話をしてくれました。私はそんな時間が大好きでした。

中学3年生の時は、高校の進学祝いにと、私に好きな生地を選ばせてくれ、ダッフルコートを作ってくれました。裏地も、前をとめる水牛の角も好きな物を選び、大喜びの私に目を細めていた父でしたが、後から、生地代だけで十数万円かかつて、母から聞かれ、びっくりもしました。

そんな環境で育つた私は、自然とファッショニに興味を持ちはじめ、時には自分の洋服を作るまでになりました。父の仕事を手伝っていた母も、洋裁が得意だったので、一緒に女の子向けのかわいらしいプリント生地を買いに行き、夏用のワンピース作りを手伝つて

もらいました。自分のデザインを型紙におこす方法は父に教わり、好きな布地で、思つたままの洋服を作る楽しさを知りました。

やがて進路を決める時期がやつてきて、デザインを本格的に学べる学校を目指すことを決めました。選考は、テキスタイル（素材）科にしました。洋服を作る事も大好きでしたが、それ以上に布が大好きで、世界中の布の素材を学びたいと思いました。又、心のどこかに父の仕事を継ぎたい、という気持ちも、あつたと思います。必死に勉強し、無事進学が決まった時は、誰よりも父が喜んでくれました。入学祝いの席でいつもはお酒を飲まない父が、うれしそうにビールを飲む姿を見て、あらためて、この先がんばろうという気持ちがわいてきました。

私は学校に、ほど近い池袋にアパートを借り新生活をスタートさせました。ところが、親元を離れた自由な生活が次第に私を変えるのです。大好きなミュージシャンのライブに通いつめるようになり、劇団にも興味が出てきて、勉強もせずライブハウスに通つたり演劇を見る為に学校をさぼるようになつていきました。両親に学費、生活費を送つてもらう身でありながら、当時の私は楽しい事が優先、罪悪感のかけらもありませんでした。学校の課題もやらず出席日数も足りない、当然退学の危機がせまります。

そんな時、父が突然脳梗塞で倒れました。仕事復帰は無理との事。私は、やつと目が覚め一心に勉強をしました。何とか卒業出来たのですが卒業式の前に父は亡くなりました。しばらく立ち直れませんでした。結局実家の店はたたみ、今は母が細々と、かけはぎ店をやっています。私はなんとかアパレル会社に就職が決まり、必死に働き、今では、好きなテキスタイルを扱う部間の主任をまかされるまでになりました。

今でも私の心には笑顔の父がいます。父から教えられたテキスタイルの奥深さ、洋服をつくる楽しさを胸に、この仕事を愛し、続けていきたいと亡き父に誓うのでした。